

泥棒とイーダ

第08回 踏み越えた人たち

牧田真有子

激しくも繊細に全身でリズムをとりながら、イヤホンからの音楽に陶酔している彼に切り出すのは、つらい仕事だった。

「沼男、すごく言いくいんだけどリュックの底からお茶ふうのものが流れ出てる。いま流れ終わるとこ」

彼は「おお亜季」と言いながらあわただしく荷物を体の前に回し、水筒を取り出しながら覗きこんだ。

「なんと切ねえ。ノートがお茶漬けに」

人が通らないときはひっそりと閉じていそうな裏庭だが、今日は梅が、灯るように咲いていた。以前史乃が私の体操着を沈めた池のふちに、私たちは腰掛けた。沼男のリュックサックの中身を出して水気を切り、拭いた順にふちに並べていく。長いあいだ底に堆積していたらしいプリント類、黒い唇の形のバッジがついた生成りのペンケース、単語帳。通りがかった眠そうな顔の同級生が、経緯を察して「沼男ー、ちゃんと蓋して生きようや」と揶揄した。

「これは草木染めだ！ 考えようによつては」

沼男は条件つきで語気を荒げた。

「染色家への道ひらけたな」

同級生は眠そうに笑って、挨拶の類いはなしでぶらぶら歩き出した。

あとは誰も通らなかった。校舎の各階の廊下から、春休みを目前にした生徒たちの、にぎやかな話し声ばかりたくさん降ってきた。「また明日持ってくるね」という、いま聞こえたばかりの声は、史乃に似ている。目を合わさず言葉も交わさなくなつてから長い。しかし学級討議などの折に臆せず発言する彼女の澄んだ声を、耳にする機会は多かった。沼男

がさっきまで一人で盛大に聴いていたバンドの話をしながら、私たちは後始末を終えた。佐原さばらさんと違い、彼といると体から余分な力が抜ける。こうして何ということもなく沼男といるだけで自分がいかに充電できるか、自分でよくわかっていた。でもおそらく、このやり方で充電するのはあまり行儀のいいことじゃない。私が立ち上がると沼男は礼を言った。「いいの、全然。遅咲きの梅を堪能したし」

私が花を見遣ると沼男は目を丸くした。

「まじで梅の木が生えてる。今日突然」

「ちよっと前まで蕾だったんだよ」私は呆れた。「冬が終わるね」

「寒い好きなのにな。将来モスクワに留学しようかと思ってるくらい」

「染色家になった後？」私は笑った。彼もにんまりしたが、「なる前」と応じた声には、聞き慣れない響きがあった。

「ひよっとして本気？」

「なぜか動機はないけど、なぜか本気だよ。この頭、すでにロシア帽被ってるみたいだしな。とりあえずロシア語会話でも習おうかと思ってるんだけどさ」

沼男は両手でふさふさの黒髪をそれらしく形成し、例の一発芸で瞬間的に彫りの深い顔をこなしてから言った。

「ネットで探してみたけど、さすがにこの辺、ないよな。英会話教室ばっかり。もしあっても、月謝高いのは論外だし」

彼の背後の池の底を、鮒ふなが黒々と泳いでいる。私は「目録」をざっと思い出していた。リストの特技欄にロシア語と書いていた人がいたはずだ。

けれど〈ICh〉を利用するにはメンバーとしてのパスワードを持っていること、自分も目録のページとなっていることが前提だ。私はもうアクセスできないし、沼男にあの会のことを教えるつもりもなかった。それが、どちらを守るためなのか自分でもよくわからなかった。沼男か、あるいはイーダ会か。

セツから伝え聞くところによると、私と渡会わたらいさんのパイロット版を皮切りに、〈The〉はゆっくりと動きだしていた。ITに対する親和性が低く、セツのプランにも漠然とした拒否反応をもったはずのメンバーが多いことを考えれば非常にすんなりした滑り出しといえる。さすが真面目すぎて道を踏み外しそうになっている集団だけのことはあった。

「どうした。染め上がりに納得いかなかったか」

とうに腰を上げて歩き出そうとしていた沼男が振り返り、私もスクールバッグを肩にかけてあとにつづいた。

行儀はよくなくても充電したので、その分は彼のために私ができることをしたかった。

その夜、趣味の人である父に語学習得のヒントを尋ねてみた。案の定フランス語に凝ったことがあるという彼は、その文法についての、行方の知れない演説を始めた。すると今度は同じ食卓で話を聞いていた母が割り込んできた。県内にある国際交流センターの掲示板には、さまざまな国の人が個人レッスンの生徒募集の貼紙をしているらしい。彼女は国際交流するつもりはないものの、センター内のカフェのケーキがおいしいから時々行くのだと言う。セツが言うとおり、ひとは実に多様な情報を大量に持ち歩いているものだ。可笑しいくらい何食わぬ顔で。个性的で誰とも分かち合えない感情や記憶に基準を合わせると、人と人とはいつも容易く隔てられてしまう。でも情報にだけ基準をあわせれば、そこには鍵のないドアしかない。行き来できる道しかない。どんな現実の断片を採集するかという点にだけ、「私」が現れる。

翌日の放課後は風が強かった。私は何度も地図を飛ばされそうになりながら、曇り空の下を自転車で一時間以上さまよい、昨日まで存在すら知らなかったそのセンターへ閉館直前にすべり込んだ。オーダーストックしたカフェから、すらりと背が高く顎の細い白人の男女が喋りながら出てきて、図書室らしい部屋へ消えていった。

画鋏がひょうの跡だらけの大きなポードには、カナダや中国やイタリアのひとたちの手書きの貼紙にまじってロシアからの留学生だというひとのそれ

もあった。私は沼男に電話をかけて読み上げた。

「そのホームページはチェックしたんだけどさ」

彼は勢いのあるやわらかな声で言った。

「そんなアナログな掲示板のことは知らなかった。しかしなんでまた亜季がそこに？」

ここのケーキがおいしいから時々ね、と私は言った。

アパートの前で前屈みになって自転車に施錠せいようしていると、階段を降りる足音がして、黒っぽいスーツ姿の佐原さんが背後を通った。彼の文机の傍らによく見かける、年季の入った紙袋を提げている。私が振り向かなければ声も掛けないまま行ってしまうつもりだったのだ。いやになるなあ、と小さくぼやいたのが聞こえたらしく佐原さんは立ちどまってこちらを一瞥した。

「仕事？」気まづく思いながら私は言った。

「行ってくる」実にさりげない返事だった。

佐原さんがさりげないとこちらは調子が狂う。それで、もう用はないはずなのにふらふらと階段を上がってしまった。

関心を寄せつつもサイトを見るだけにとどまっていた潜在的メンバーを、そして既会員のこれまで知られていなかった一面を「可視化」した〈Iida〉は、そこから削除された時点で私が部外者であることも洗い出した。これまでずっとやむやに見逃されてきたことだった。ここに来るのは渡会さんの依頼を請け負った日以来だ。

佐原さんの部屋には目黒さんが一人でいた。

「亜季さんがぎくつとした」

思ったことは余さず口にする人になった彼女は、目は合わずにそう指摘し、赤いノートパソコンのキーボードから指を下ろして言った。

「代表はさっき、腕立て伏せと腹筋をしてシャワーに入ってからスーツに着替えて出られましたよ」

そこで会いましたと応じながら、いくらメンバー相手とはいえ区切り

なく日常を公開して暮らす、佐原さんのねじれた根性が妙に眩しかった。「目黒さんは〈Ita〉で何か探してるんですか」

長い髪をすっぱり切って、彼女は涼しそうな首をしていた。憂いのあたる深刻な顔立ちには、以前は彼女の全印象を決定づけたが、今はシンプルな短髪や澄んだ色の服などとバランスをとって彼女を彩る一要素になっていた。休学している大学にも、四月から戻る予定らしい。

「ブログの更新です。交代制だから仕方ないけど、私は苦手で。セツミたいには書けない」

「何も、そこに基準を合わせなくてもいいんじゃないですか」

「せめてオリジナルに合わせておきたいんですよ。変に刺激したくない。皆もそう思ってるんじゃないかな」

「刺激？」

そのときはちゃんと音がして部屋の電気が点いた。振り返ると戸口のスイッチを入れたのはハイイロだった。四角い顎に鋭利な鼻すじ、細い目。室木と張る長身だが骨格は対照的に広々としている。

「代表はお出かけですか」

相手との距離や話の内容に関わらず、彼は腹の底から声を出す。荒げるのは聞いたことがない。今日は芥子色からしのカーディガンだ。彼の服で他に知っているのは、芥子色の丸首セーターと芥子色のフードつきスウェット。下はジーンズと決まっている。目黒さんはさっきと同様に応じた。独特の静かな大声で「ありがとう」と言い、ハイイロは律儀にスイッチをオフにして出て行った。照明のもとにさらされたときの部屋と私たちは、どこかへ掻き消えてしまった。私は自分の手の甲を見た。

「よっぽど代表に惚れほこんでるんでしょね。そういうええあの人、夏は芥子色のTシャツなんですって」

私と同じく冬以降の彼しか知らないはずの目黒さんが言った。常に自信なさげな物腰とは裏腹に情報通なのだ。彼女は指を組んでは離れた。

「もとはポルトガルで暮らしてたらしいですよ」

「かっこいい」

「どうしても日本の社会になじめず、ポルトガルでひきこもり生活を」
「結局なじんでないじゃないですか」

「で、何かの拍子にイーダ会のブログを見て代表のこと知って、しょっちゅう『代表くんばんは』やってるうちに一步外へ踏み出す気になって、このアパートまで来たって」

すごい歩幅じゃないですかとは言えなかった。新しい思いが射し込むときまで彼がふりきれなかっただろう暗黒や、思いを実際の行動に移すときのやりきれないような怖さや、佐原さんにお茶を運ぶ若白髪の彼の満足そうな表情が、私の心の余っているところをいつのまにか塞いでいた。ハイイロが投稿の常連だったのは私も知っている。なぜカラシイロではなくハイイロかというと、それが彼のハンドルネームだったからだ。本名は誰も知らない。目黒さんは言った。

「ハイイロにとってはきつと、村だろうが目録だろうが大差ないんでしようね。自分をやめて代表のそばにいて、代表と自分の人生を同一視できていれば済むんだもの。いちばん最初に会ったとき代表が着ていたのが芥子色の服だったらしいですね」

それからしばらく彼女は黙ってキーボードをたたいた。明日数学の補習がある私は、かばんからテキストを出して予習していた。目黒さんがこちらの様子を窺ったときすかさず表紙を見せたが、頼む前から、腕を交差させるジェスチャーで断られた。彼女は難関私大の文学部の学生だ。青みがかかった軽い闇が部屋に満ち、私が改めて部屋の電灯を点けたとき、目黒さんは言った。

「最近、そこはかとなくやばくないですか」

「ハイイロのこと？」

「いや、『代表くんばんは』っていうやつ」

「始まった瞬間からやばいと思いますけど」

「亜季さん最近の見てます？」

彼女は疑わしげなまなざしとノートパソコンとを私の方へ向けた。

『代表こんばんは。代表にとっては、この世界は自分の体の延長なんですよ。ね。』「ここ」が代表の透きとおった体だと認識することは、そのまま、「私」の中断です。代表が与えてくださる安らぎです。あなたの優しさが私を消してくれる。しばらく自傷はしていません。』

『代表こんばんは。再就職が思うように決まらない焦りの中、偶然知ったこちらのサイトで代表の摩訶不思議なやさしさからちよつと元気ももらう毎日です。でも自分に合う仕事って何なのか、見極めるのはほんとに難しいですよ。』

「代表個人に固定客みたいな熱心なファンがつくことって、イーダ会にとってはどんな意味があるんですかね」

目黒さんが言った。同じような調子の投稿が、ブログを挟みつつその前にもその後にも波のように連なり、見ず知らずの人たちの思いによって象られた佐原さんの姿が何度も静かに打ち上げられてくる。

「というか、びしっと誤解してますね。『やさしさ』とかって」

私は動揺のあまり含み笑いの声になった。恋人同士になってから相手の意外な一面を知って瞠目する^{どろもく}というのは、ありふれたことかもしれないが、それにしても知らなかった面の面積がいやに大きかった。卓袱台^{ちやぶだい}に置かれた目黒さん持参のペットボトルは、ラベルは緑茶だが中身は水だ。

「さつき目黒さんが、変に刺激したくないって言ったのって」

「その人たちのことです。以前は少なくとも、一見すると善行みたいな狂気、っていう認識はぶれずに共有できてたわけでしょう。会員にしろ顔の見えない準会員にしろ。ハイイロもそう。意思とは関係なく、構造として善人具合になっちゃってる、そのことが代表像のリアリティの砦だった。でもこのところ本末転倒しちゃうてるんですよ。正気の沙汰じゃないやさしさ、とかに」

近くのガレージから聞こえる、大喧嘩中の猫二匹の唸り声とトタン屋

根の上を駆け回る音とが、騒々しかった。目黒さんは水を飲み干した。

「亜季さんと同じで、私も誤解だと思う。どう解釈しようかと彼らの自由だって、セツは言ってますけど」

「セツが？」

にわかに憂鬱になった。「矢印」にそぐわない方角を向くときの摩擦の大きさを肌で感じた。目黒さんはしずしずと言った。

「私だってセツに責任があるとは思ってないですよ。セツ自身、『今日の代表』をつづけたのは、彼について書くことと反応がいいことに気づいたからだって言ってたし、リピーターやら情報を拡散してもらえる可能性やらを増やすために、受けのいい素材を繰り返し使ったことはたしかだと思うけど、記述自体は正確ですし」

私はセツが管理していた頃のブログの様子を、できるだけ慎重に思い出しながら言った。

「代表への伝言って感じで、合言葉と心の内を残すだけだった人たちは、レスポンスなんか期待してなさそうでしたよね」

「彼らと代表の、非対称性というか非完結性というか、疎通しないからこそその自由な場の確保こそ、優先されてきた気がする。代表がなおしてくれるのが、その人の心の辛いところじゃなく『てにをは』だっていうのも、前ならこそ帳尻が合ってたと思うんです。今の人たちは、求め始めてますよね。彼を」

「このこと、目黒さん以外の人たちも話題にしたりするんですか」

「さあ。私はまだ誰とも。亜季さんは似非会員だからいいかと思って」

遠慮のない言い草だが顔を見ると謙虚なのだ。新しい投稿が着いたのは、そのときだった。パソコンは私の方に向けられたままだ。畳に掌をついて目黒さんはこちらへ身を乗り出した。二人で顔を並べて何も言わずにそれを読んだ。

『代表くんばんは。窓からたくさんの星が見える。空がなくなることは滅多にないから、私は空を好きになることを自分に許可している。好き

なものがあるから私は生きているのがうれしい。夥おびただしいものごとについて見て見ぬふりをしている。こちらが目隠しをしている間は向うからもこちらが見えない。目隠しだけがこちらをじっと見ている。私はほんとうは空によって隠されたかった。でもあなたは私の夢の中で青い。あなたは私の目隠しをはずす。さっきまで夢だったものは、のこらず、青になる。私たちは遍在する。それはあなたの慈悲の色だ』

春休みは砂丘めあてで鳥取へ旅行した。佐原さんにもセツにも、一度も会わなかった。

旅行のきっかけは、短期のアルバイト先で一緒にお昼を食べた隣町の女子高の二人組みが、チカの知り合いだと発覚したことだった。チカの交友関係は広い。時々本人のいないところで、意外な抜け道が通じ合う。私たちは街外れの小さな工場で、ベルトコンベアに載って運ばれてくる菓子を次から次へと箱詰めにした。全員お揃いの白い帽子と白いマスクの間からのぞく目が、チカの友人たちの目だと、視線が合うたび笑みを交わした。手渡しの茶封筒入り給料を受け取った最終日の帰り道はチカを呼び出し、ドーナツ店で四人、勢いだけで旅の予定を組んだのだった。乾いて乾いて影もない丘の向うは青い海だ。

バスを降りるとだしぬけに始まる砂の空間は、想像していたよりもずっと広く、深く、高かった。さらさらした急斜面を四人は賑々にぎやかにしくのぼった。箸が転がっても可笑しいと評判の年頃に、これだけの量の砂を見せたらひとたまりもない。丘のあちこちを、砂に足をとられつつ観光客たちがゆっくり上ったり下りたりしていた。視界を遮るものがない。遠くまで点々と、小さな姿が見える。駱駝らくだの姿も見える。

たった一泊二日とはいえ友達同士での旅行は各々にとって初めてだった。間柄の深さもまだ定まっていなくて、観光名所を訪れながら私たちはずっとはしゃいでいた。イーダ会をめぐる期待も憂いも散り散りになり、持っていた文庫本を一ページも読むことなく、路線図前での熱い討議を経て乗り込んだバスは真逆に走り出し、宿泊先では怪談のやりす

ぎで一人が涙ぐみ、過激な心理テストのやりすぎで一人が倒れ、温泉の脱衣所ですてきな嘘が飛び交った。冷静な発言を聞いたのは一度きりで、チカの声だった。浴衣に茶羽織でそぞろ歩く人たちにまじって、夕暮れの温泉街をぶらぶらしていたときだ。大学では国際関係学を専攻したいのだと彼女は言った。どうしても地元の、あの小さな街で人生を終えたくないとも言った。初耳だった。皆で感心した。感心の仕方がエスカレートして、またもやひとたまりもなく、くだらない集団に戻った。

夜、灯りを消してそれぞれがベッドにもぐりこんだ頃、ドーナツ店で砂丘に行きたいと言いだした張本人の女の子が、「そういえば私、冬の砂丘に来たかったんだ」と今さら記憶を正したので皆わらった。「なんで冬のなの」ともう一人の女の子が訊いた。

「子どものとき一度、来たんだよ。雪の日に。砂丘なのに砂なんか見えないわけ。一面、真っ白。その向うは荒れ狂う日本海でしょう。風に吹き飛ばされそうで怖くて、息苦しくて、痛いように寒いし顔は真っ赤で。だけど、ぞっとするほど綺麗な光景だった」

質問した子が「私パス。そんな寒いのも無理」と言い、「亜季の寝つきの良さ子猫級」とチカがからかう口調で言うのが聞こえた。私は両手で掛け布団を額まで引き上げて、想像していた。見渡す限りうねる海水の、重い灰色。複雑に碎ける波頭と空の、比類ない白さ。人も駱駝もない。果てしなく白い丘について。

アパート自身はもう廃墟だと思っていそうな、佐原さんのアパートに着くと、くわえ煙草のおばさんが欠けたティーカップで巨大アロエの鉢に水を遣っているところだった。一階の住人で、開け放された戸口には異界で買ってきたとしか思えぬ色彩のビーズ暖簾のれんがかすかにそよいでいる。彼女は私を見ると指に煙草を挟んで口から離れた。何か話があるのかと思ひ私はつんのめるように足をとめたが、おばさんは無言で得体の知れぬものを見る目を向けるだけだ。私もくやしませに彼女の暖簾を凝視してから階段を上がった。春休み最後の日だった。

部屋には俊子としこさんがいた。よく見ると佐原さんも室木むろきもヨーもいるのだが、俊子さんの発散する丈夫な空気があたりを占めていた。彼女はイーダ会メンバーを、いないものとして振舞うのが常なのだ。俊子さんは卓袱台に佐原さんのものらしい通帳や支払明細や請求書や領収書を並べ、手早く卓卓をたたいては小型のノートに記帳していた。募金箱を見ると自制心がきかなくなる弟に代わって姉が家計を管理しているのだ。彼女は佐原さんを卓袱台に呼びつけていくつかの指導と通告をし、作業を締めくくった。それから私の方に顔を上げて「あんまり来なさんと言ったのに」と厳しい目をした。

「旅行のおみやげを持ってきたくて」

かばんの中に勉強道具を待機させたまま、私は駅で買った菓子折を差し出した。「そんなのいいのに。私の分だけで」と俊子さんは早速あげ、一つ、口に放り込んだ。佐原さんは梨模様の包装紙をメモ帳へ仕立てるのに余念がない。

「そうそう、あなたにも言ってなかったけど」俊子さんは隣の弟を一瞥して言った。「三人目ができたの」

私は歓声をあげた。佐原さんは何かを思い出すように目を細めてから、俊子さんをまっすぐに見つめて「おめでとう」と言った。ないがしろにされても礼儀正しさを忘れない室木とヨーが、「代表のお姉さん、おめでとうございます」と口々に言った。俊子さんは手首につけていた白いヘアゴムで、傷んだ明るい髪を束ねて台所に移動した。鱈あじをさばくらしかった。佐原さんは持ち場に戻り、私はさりげなく古文の問題集を始めた。やがて魚を焼く煙がもうもうと流れてきた。野菜をすすぐ水の音や、包丁で刻む音に混じって、室木の抑揚のある話し声があった。

「代表のお姉さんもうご存知だと思いますが、僕たちゆくゆくは自給自足の村を作るんです。もちろん道のりは平坦なものではありませんが、めでたく完成した際には、ぜひお子さんを預らせていただけませんか？ 小学校に通うまでもいいんです。歪んだ自己形成に陥る前に、大きな存在の一部として自分が丸ごと肯定される体験を持ち、百パーセ

ント安らかで健全な環境で育つことが、その子にとっていかに幸福なことか。僕たちはその子が実に羨ましい」

「誰が渡すか」

俊子さんは背を向けたまま室木に言った。底光りするような声だった。彼女がイーダ会をそこに存在するものとして扱ったのは、私を知る限りこれをはじめだ。室木もハツとしたようすで、しかしみっともない狼狽は見せずに言った。

「差し出がましいことを申しました。どうぞご放念ください」

俊子さんは許さなかった。彼女は今度は体の正面を室木の方に向け、相手と視線を結んだままで、文机の佐原さんに話しかけた。

「あんたの生活を支えることはこの人たちと通じることになる。いやなのよ、もう。今私の目の前で彼らと絶縁しなさい」

焼き網にこびりついた炭に火が移り、高く立ち昇っても、彼女は動かなかった。姿勢を低くしたヨーがコンロの火をとめ、網に水をかけた。「しない」と煙の向うから佐原さんが返事をした。室木がはじめられたように代表の方を見た。俊子さんは髪をほどくと、急がない足取りでハンドバッグとコートを攜み、部屋を出ていった。蛍光マーカートのキャップを外した格好のまま私は静止していた。

彼女がいなければ佐原さんは今日まで身がもたなかっただろう。彼の両親はもう彼に会おうとしないし、親身になってくれる友人もいないのだ。彼女を追うべきだった。でも私はとっさに、魚を焼きつづけることの方を選んだ。佐原さんは基本的に植物しか料理しない反面、既成事実として差し出される「自分のための動物の死体」は、宿命的な表情を浮かべて残さず平らげる。生焼けのまま放置され傷んだ魚でも、彼はとことん食べるにちがいないのだ。「代表についてきてよかった」とか「我々も心を新たに精進します」とか、室木とヨーが色めき立った声で佐原さんに喋りかけていた。私は台所の窓を全開にし、菜箸で二尾の鰻を裏返してコンロに点火した。まな板の上で切り残されている玉葱や、水を張ったポウルに浸かっている若布を刻み、味噌汁を作る。下拵えし

でレンジで蒸されていた鶏肉は、取り出して一口大に切り、皿に千切り
のきゅうりを敷いた上へ盛りつける。たれに關しては何の糸口もなかつたので醤油をかけた。「おめでとう」と弟の顔で言った佐原さんの声が、特殊なペンキで塗った文字のように、時間が経ってもこの部屋から消えなかつた。それなのに彼女は二度とこの部屋に来ないかもしれない。窓の外では相変わらず床屋の赤白青の縞模様がどこにもたどり着かずに戻っている。私は黙々と茶碗にご飯をよそった。

室木たちは帰っていき、私もジャケット代わりのぶかぶかのパーカを頭から被った。

「食べていけば。一人でこんなに食えない」

食器棚を開けながら佐原さんが言った。

「家で食べられなくなるもの」私は言った。

「どうとでもなるだろう。女子高生なんだし」

この人は女子高生というものを印籠か何かと知っているらしい。佐原さんは早くも取り分け皿を多めに並べていた。今ごろ俊子さんはどんな目つきで自転車をこいでいるだろう。食欲はなかったが私は彼の向かいに座ってもそもそと食べ始めた。彼はめずらしくこちらをじろじろ見ていた。

「一時間も経ってないのに、なんでさっきうちに来たときより痩せてるんだ」

「ジョギングの効果がだしぬけに出たんでしょう」

「おまえが落ち込んでどうする」

佐原さんは苦笑いした。私はぎよつとした。メンバーのお見舞いに行つた帰り道、雪の上で立ちどまった彼が、ふいに一人の普通の青年とすり替わつたように思えた、あのときと同じだった。同じだけれど、今回はなんとなく決定的だった。私はもう、どんなに美しい砂の丘で、どんなにくだらないことで転げまわって笑っていても、佐原さんを忘れきれない。そういうきざしが、体の深いところをすうっと流れた。

古ぼけたインターホンが鳴った。玄関のドアが開いて、「すみません、

忘れ物」とヨーが斜めに入ってきた。ベルトの擦り切れそうな腕時計を窓のそばで拾い、一度も足をとめないまま軽く会釈して出て行く。

「あの人、もうだいぶ遠くまで行ってただろうによく戻ってきたね」

私は小声で言った。

「いや、あいつのうちってこの下」

「引越してきたの？ このアパートに？ わざわざ？」

「何せ空き室あるし、他にも越してきそうなやつらいるよ」

くわえ煙草のおばさんの、疑いに満ちたまなざしにも根拠があったわけだ。佐原さん一人でも「薄気味悪いご近所さん」三、四世帯分をまかなっているところへ、その仲間がコミュニティを作りそうなのだから。当然私も一味と思われるのだろう。

「ブレ村じゃん。佐原さんはほんと、あの人たちのこととことん許容するんだから」

「あんなやつら大嫌いだ」

「だけど、くつろげるならもうどこでもいい、ってこと？ 室木さんたちは、ポイ捨てても社会的弱者からの搾取も熱帯雨林の減少もない、百パーセント安らかで健全な環境の中心にあなただを据えるつもりだものね」

私は思い切って言った。この間パーティードレスのセツが放った何気ない予言を手繰り寄せて。

病院帰りの雪の道では、私は面食らうばかりで何もわからなかったが、たぶん佐原さんはあのとき唐突に気づいたのだ。イーダ会から求められるばかりでなく、自分もまた知らず知らずイーダ会を求めていることに今ここにある瑕疵かしを正すのではなく、瑕疵のない完璧な環境への埋没を望む、もう一つの自分自身の姿に。気づくのが遅かったのも無理はない。彼は自分の欲望のとおりに人生を引っ張ってきたのだ。立ちどまってみることも、誰かによって立ちどまらされることもなく。

灯油を売るトラックの放送が、にわかにはそばで聞こえ、じっくり時間をかけて遠ざかっていく。猫舌の佐原さんは味噌汁の順番を最後に回している。

私が言ったことを、佐原さんは否定しなかった。私は心の中で咳払いした。他人の弱さにじかに触れたら次はどうすればいいのか、どこかにマニュアルがあればいいのに、と思った。

「佐原さんは私に、死にたいときは死んでくれって言ったけど」

「おう」

「佐原さんはどうして死なないの」

「子どもがいるから」

「ん？」

「俺の子を置いては死ねない」

私は箸を持ったまま、しばらくは風にたなびく煙よりも茫漠としたが、気を取り直して「セツとの？」と訊いた。彼といると気を取り直す腹筋のようなものが養える。

「ちがう。その前につきあってたやつが秘密裏に生んだ。どうしても欲しかったんだと、赤ん坊が。男の子なんだと。会ったことないけど」

「戸籍上は」

「父親じゃない。誰にも言わないって言ってた。でもいつその女が息子連れて現れるかわからんだろ。借金で夜逃げするからとか、余命いくばくもないからとか言ってる」

「来るか来ないかわかんないそのときに備えて、死なずに待機してるわけ」

「息子にとってだけは、俺の死は瑕疵だ」

佐原さんは卓袱台に両手をつけて膝立ちになり、私も袖をたくし上げて、二人の使った食器を重ね集めた。塗梔が新素材みたいな感触なのは、おそらく指先に充分な力が入っていないせいだ。

始業式の朝はよく晴れていた。花を咲かせた中庭の白木蓮は、青空にあまりにもくつきりと映え、植物というよりシグナルの一種みたいに見えた。校舎脇の駐輪場で、横手から声を掛けられた。

「おはよう。式の前にクラス替えの掲示見ないと。急がなきゃね」

鍵を制服のポケットに突っ込みながら私は上体をひねった。数台の自

転車をあいだに挟んでこちらに微笑みかけているのは、史乃だ。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」「群像」09年5月号、「予言残像」「群像」10年6月号、「今どこ?」「WB」20号、「合図」（早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの「距離」）など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2013

published by wasedabungaku 2013